



坪中内
田 田
讓勘百
治助閒
集

日本文學全集

23

新潮社



Printed in Japan ©

日本文學全集 23

内田百閒

中 勘助集

坪田讓治

昭和三十八年八月十六日印刷
昭和三十八年八月二十日發行

著 者

内 田 百 閒
中 田 勘 助
坪 田 讓 治

編 者

高 橋 義 孝

發行者

佐 藤 亮 一

印刷者

高 橋 武 夫

發行所

株式會社 新潮社

東京都新宿区矢來町七一
電話東京四七二二 振替東京六〇八

印刷所・大日本印刷株式會社

製 本・新宿加藤製本所

本文用紙・十條製紙株式會社

箱貼・カバ・特種製紙株式會社

表紙布地・望月株式會社

定価 二九〇円

（落丁・乱丁本はお取替えいたします）

目次

内田百閒集

冥途

旅順入城式

昇天

殘月

サラサーテの盤

實說艸平記

特別阿房列車

二

一五

三

六

五

二三

彼ハ猫デアル

一四五

朝雨

一五三

中 勘 助 集

銀 の 匙

一五九

白 鳥 の 話

二七三

坪田 讓 治 集

正 太 の 馬

三〇三

善 太 の 四 季

三二五

お化けの世界

三三三

風の中の子供

三五五

せみと蓮の花

四二三

注解

四七五

年譜

四六九

解説

四九一

高橋義孝

内田百閒集

冥途

高い、大きな、暗い土手が、何處から何處へ行くのか解らない、靜かに、冷たく、夜の中を走つてゐる。その土手の下に、小屋掛けの一ぜんめし屋が一軒あつた。カンテラの光りが土手の黒い腹にうるんだ様な暈を浮かしてゐる。私は、一ぜんめし屋の白ら白らした腰掛に、腰を掛けてゐた。何も食つてはゐなかつた。ただ何となく、人のなつかしさが身に沁むやうな心持でゐた。卓子の上にはなんにも乗つてゐない。淋しい板の光が私の顔を冷たくする。

私の隣りの腰掛に、四五人一連れの客が、何か食つてゐた。沈んだやうな聲で、面白さうに話しあつて、時時靜かに笑つた。その中の一人がこんな事を云つた。「提燈をともして、お迎へをたてると云ふ程でもなし、なし」

私はそれを空耳で聞いた。何の事だか解らないのだけれども、何故だか氣にかかつて、聞き流してしまへないから考へてゐた。するとその内に、私はふと腹がたつて來た。私のことを云つたのらしい。振り向いてその男の方を見ようとしたけれども、どれが云つたのだかぼんやりしてゐて解らない。その時に、外の聲がまたかう云つた。大きな、響きのない聲であつた。「まあ仕方がない。あんなになるのも、こちらの所爲だ」

その聲を聞いてから、また暫らくぼんやりしてゐた。すると私は、俄にほろりとして來て、涙が流れた。何といふ事もなく、ただ、今の自分が悲しくて堪らない。けれども私はつい思ひ出せさうな氣がしながら、その悲しみの源を忘れてゐる。

それから暫らくして、私は酢のかかつた人參葉を食ひ、どろどろした自然生の汁を飲んだ。隣りの一連れもまた外の事を何だかいろいろ話し合つてゐる。さうして時時靜かに笑ふ。さつき大きな聲をした人は五十餘りの年寄りである。その人丈が私の目に、影繪の様に映つてゐて、頻りに手眞似などをして、連れの人に

話しかけてゐるのが見える。けれども、そこに見えてゐながら、その様子が私には、はつきりしない。話してゐる事もよく解らない。さつき何か云つた時の様には聞こえない。

時時土手の上を通るものがある。時をさした様に來て、ぢきに行つてしまふ。その時は、非常に淋しい影を射して身動きも出来ない。みんな黙つてしまつて、隣りの連れは抱き合ふ様に身を寄せてゐる。私は、一人だから、手を組み合はせ、足を竦めて、ぢつとしてゐる。

通つてしまふと、隣りはまた、ぼつりぼつりと話し出す。けれども、矢張り、私には、様子も言葉もはつきりしない。しかし、しつとりした、しめやかな團樂を私は羨ましく思ふ。

私の前に、障子が裏を向けて、閉てある。その障子の紙を、羽根の燃れた様になつて飛べないらしい蜂が、一匹、かさかさ、かさかさと上つて行く。その蜂だけが、私には、外の物よりも非常にはつきりと見えた。

隣りの一連れも、蜂を見たらしい。さつきの人が、

蜂があると云つた。その聲も、私には、はつきり聞こえた。それから、こんな事を云つた。

「それは、それは、大きな蜂だつた。熊ん蜂といふのだらう。この親指ぐらゐもあつた」

さう云つて、その人が親指をたてた。その親指が、また、はつきりと私に見えた。何だか見覚えのある様ななつかしさが、心の底から湧き出して、ぢつと見てゐる内に涙がにじんだ。

「ビードロの筒に入れて紙で目ばりをする、と、蜂が筒の中を、上つたり下りたりして唸る度に、目張りの紙が、オルガンの様に鳴つた」

その聲が次第に、はつきりして來るにつれて、私は何とも知れずなつかしさに堪へなくなつた。私は何物かにもたれ掛かる様な心で、その聲を聞いてゐた。すると、その人が、またかう云つた。

「それから己の机にのせて眺めながら考へてゐると、子供が來て、くれくれとせがんだ。強情な子でね、云ひ出したら聞かない。己はつい腹を立てた。ビードロの筒を持つて縁側へ出たら庭石に日が照つてゐた」

私は、日のあたつてゐる舟の形をした庭石を、まぎ

まざと見る様な氣がした。

「石で微塵に毀れて、蜂が、その中から、浮き上がるやうに出て來た。ああ、その蜂は逃げてしまつたよ。大きな蜂だつた。ほんとに大きな蜂だつた」

「お父様」と私は泣きながら呼んだ。

けれども私の聲は向うへ通じなかつたらしい。みんなが靜かに起ち上がつて、外へ出て行つた。

「さうだ、矢つ張りさうだ」と思つて、私はその後を追はうとした。けれどもその一連れは、もうそのあたりに居なかつた。

そこいらを、うろうろ探してゐる内に、その連れの立つ時、「そろそろまた行かうか」と云つた父らしい人の聲が、私の耳に浮いて出た。私は、その聲を、もうさつきに聞いてゐたのである。

月も星も見えない、空明りさへない暗闇の中に、土手の上だけ、ぼうと薄白い明りが流れてゐる。さつきの一連れが、何時の間にか土手に上つて、その白んだ中を、ぼんやりした尾を引く様に行くのが見えた。私は、その中の父を、今一目見ようとしたけれども、もう四五人の姿がうるんだ様に溶け合つてゐて、どれが

父だか、解らなかつた。

私は涙のこぼれ落ちる目を伏せた。黒い土手の腹に、私の姿がカンテラの光りの影になつて大きく映つてゐる。私はその影を眺めながら、長い間泣いてゐた。それから土手を後にして、暗い畑の道へ歸つて來た。

(大正十年)

旅順入城式

五月十日。銀婚式奉祝の日曜日に、法政大學の講堂で活動寫眞の會があつたから、私も見に行つた。

講堂の窓に黒い布を張つて、中は眞暗だつた。隙間から射し込む晝の光は變に青かつた。

色色取り止めもない景色や人の顔が寫つては消えて行つた。陸軍省から借りて來た煙幕射撃の寫眞などは最も取り止めのないところがよかつた。無暗に煙が濛濛と畫面に立ち罩めて、何も見えなくなつてしまつた。その煙が消えて畫面が明かると思ふと、寫眞が消えてしまつて、講堂の中が明かなくなつた。

それから亞米利加の喜劇や實寫などが、明かなくなつたり消えたりした後、旅順開城の寫眞が始まつた。

陸軍省から來た將校が演壇に上がつて、寫眞の説明をした。この實寫は當時獨逸の觀戰武官が撮影したもの

で、最近偶然の機會に日本陸軍省の手に入つた。水師營に於ける乃木ステッセル兩將軍の會見の實況も這入つて居り又二龍山爆破の刹那も寫されてゐる、恐らく世界の實と申してよろしからうと思ひますとその將校が云つた。さうして演壇に立つたまま、急に闇の中に沈んでしまつた。そのカーキ色の軍服姿がまだ私の臉の裏に消えない時、肋骨服を著て長い髭を生やして、反り身の日本刀を抜いた小隊長に引率せられてゐる一隊の出征軍が、横濱の伊勢崎町の道を行く寫眞が寫つた。兵隊の顔はどれもこれも皆悲しさうであつた。私はその一場面を見ただけで、二十年前に歌ひ忘れた軍歌の節を思ひ出す様な氣持がした。

旅順を取り卷く山山の姿が、幾つもの峰を連らねて、青色に寫し出された時、私は自分の昔の記憶を展いて見るやうな不思議な悲哀を感じ出した。何と云ふ悲しい山の姿だらう。峰を覆ふ空には光がなくて、山のうしろは薄暗かつた。あの一番暗い空の下に旅順口があるのだと思つた。

大砲を山に運び上げる場面があつた。暗い山道を輪郭のはつきりしない一隊の兵士が、喘ぎ喘ぎ大砲を引

張つて上がつた。年を取つた下士が列外にゐて、兩手を同時に前うしろに振りながら掛け聲をかけた。下士の聲は、獸が泣いてゐる様だつた。

私は隣りにゐる者に口を利いた。

「苦しいだらうね」

「はあ」とだれだか答へた。

首を垂れて、暗い地面を見つめながら、重い綱を引張つて一足づつ登つて行つた。首のない兵隊の固まりが動いてゐる様な氣がした。その中に一人不意に顔を上げた者があつた。空は道の色と同じ様に暗かつた。暗い空を峻しく切つて、私共の登つて行く前に、うな垂れた犬の影法師の様な峰がそり立つた。

「あれは何と云ふ山だらう」と私がきいた。

「知りません」と私の傍に起つて見てゐた學生が答へた。

山砲を打つところがあつた。崖の下の凹みに、小さな車^{くるま}のついた大砲を置いて、五六人の兵士が装填^{そうてん}しては頻りに打つた。大砲は一發打つと、自分の反動で凹みの中を前後にころがり廻つた。砲口から出る白い煙は、すぐに消えてなくなつた。音も暗い山の腹に吸は

れて、木魂^{こたま}もなく消えてしまつたに違ひない。彈丸は何處に飛んで行くのだから、なほ心もとなかつた。しかしそれでも打たずにはゐられないだらうと思つた。打たずにゐたら、恐ろしくて堪るまい。敵と味方と兩方から、暗い山を挟んで、晝も夜も絶え間なしに恐ろしい音を響かせた。その爲に山の姿も變はつたに違ひない。恐ろしい事だ。そこにある五六人の兵隊も、怖いからああして大砲を打つてゐるのだ。砲口の白い煙が消えてしまふと、私は心配になつた。狙ひなど、どうでもいいから、早く次ぎを打つてくれればいいと思つて、いらいらした。

遠い山の背から、不意に恐ろしい煙の塊りが立ち騰つて、煙の中を幾十とも幾百とも知れない輝くものが、筋になつて飛んだ。さうしてすぐ又後から、新しい煙の塊りが湧いて出た。二龍山の爆破だときいて、私は味方の爲とも敵の爲とも知れない涙が臉の奥にじんて來た。

さうして、たうとう水師營の景色になつた。邊りが白らけ返つてゐて、石壁の平家が一軒、影の様に薄くなつてゐた。向うの方から、むくむくと膨れ上がつて、

手足だか胴體だかわからない様な姿の一連れが、馬に乗つてぼんやりと近づいて來た。さうして、いくら近づいても、文目あやめがはつきりしないままに消えてしまつた。

それから土藏の様なものの建ち並んだ前を、矢張り馬に乗つた露人の一行がふらふらと通り過ぎた。さうして水師營の會見が終はつた。乃木大將の顔もステッセル將軍の顔も霧の塊りが流れた様に私の目の前を過ぎた。

惡戰二百有餘日と云ふ字幕が消えた。鐵砲も持たず背囊はいちやくも負はない兵隊が、手頭の先まで袖の垂れた外套をすぼりと著て、通つた。道の片側に遠近のわからない家が並んでゐるけれど、窓も屋根も見分けがつかなくかつた。兵隊はみんな魂の抜けた様な顔をして、ただ無意味に歩いてゐるしかつた。二百日の間に、あちらこちらの山の陰で死んだ人が、今急に起き上がつて來て、かうして列んで通るのではないかと思はれた。だれも邊りを見てゐる者はなかつた。ただ前に行く者の後姿を見て動いてゐるに過ぎなかつた。

「旅順入城式であります」

演壇にゐたさつきの將校の聲がした。

暗がり一杯詰まつてゐる見物人が不意に激しい拍手をした。

私の目から一時に涙が流れ出した。兵隊の列は、同じ様な姿で何時までも續いた。私は涙で目が曇つて、自分の前に行く者の後姿も見えなくなつた様な氣がした。邊りが何もわからなくなつて、たつた一人で知らない所を迷つてゐる様な氣持がした。

「泣くなよ」と隣りを歩いてゐる男が云つた。

すると、私の後でまだだれだか泣いてる聲が聞こえた。

拍手はまだ止まなかつた。私は涙に頬をぬらしたまま、その列の後を追つて、靜まり返つた街の中を、何處までもついて行つた。

(大正末)

